MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

ミステリ読書案内

2020. 1. 4　発行元

第 27 号　伊藤　剛

MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

「このミス2019年版」創刊30周年・30年間のキング・オブ・キングスより

平成時代のミステリの総括

平成から令和の時代に。１年前の『このミステリーがすごい！２０１９年版』に３０年間の「キング・オブ・キングス」の発表があった。新年でもあるので、この３０年の日本「平成ミステリ」の総括を考えてみた。

《『このミス』キング・オブ・キングス》

1. 生ける屍の死　山口雅也
2. ６４　横山秀夫
3. 容疑者Ｘの献身　東野圭吾
4. 火車　宮部みゆき
5. 新宿鮫　大沢在昌
6. 私が殺した少女　原　奈
7. 葉桜の季節に君を想うということ　歌野晶午
8. ゴールデンスランバー　伊坂幸太郎
9. 曾我佳城全集　泡坂妻夫
10. 独白するユニバーサル横メルカトル　平山夢明

《私なりの平成ミステリ・ベストテン》

1. 新宿鮫　大沢在昌
2. レディ・ジョーカー　髙村　薫
3. 模倣犯　宮部みゆき
4. さらば長き眠り　原　奈
5. 生ける屍の死　山口雅也
6. エトロフ発緊急電　佐々木譲
7. 魍魎の匣　京極夏彦
8. 奇想、天を動かす　島田荘司
9. ホワイトアウト　真保裕一
10. ６４　横山秀夫

『このミス』版のベストテン

平成２０年の『このミス』２０周年の時は、特別版の『もっとすごい、このミステリーがすごい！』という特別版の本を出したが、３０周年は本誌に合体してしまった。前回の特別版は、そんなに売れなかったのだろうか？　せっかく期待したのに。

平成時代３０年間の「キング・オブ・キングス」に挙げられた１０冊の本を右上の表に転載してみた。

ただ、これには注意書きがあって、「歴代（毎年の）１位作品の中から選ぶ」という限定つきのランキングであって、その意味ではやや斬新さに欠け、特徴を出すことができなかったと感じている。

私なりの「ベストテン」は…

と言うことで、私なりの「ベストテン」を作ってみた。ウーン、これでもあまり代わり映えはしないかな？　なかなか難しい。

１位は『新宿鮫』。私の読書中断時期にちょうど当たっており、評判を聞いて後から読んだ本。大沢在昌は、その前から既に注目はしていたのだが、夢中になって読んだ。「ウーン、これはすごいぞ!」と思った大傑作。

２位以下。髙村薫は何としても入れなければ…。私が「現代日本の良識」と呼ぶ思索家なので。宮部みゆきは『火車』とどちらにしようかと迷った。結局、より印象が強く残っている『模倣犯』にした。

原奈の本は、いずれも甲乙付けがたい。最終的に『さらば』にした。山口の『生ける屍』は「このミス」に取り上げられている通り。

『エトロフ発』は、佐々木譲作品が好きだから、ひとつは是非入れたかった。ただ、『エトロフ』も『生ける屍』も『奇想、天を動かす』も、平成になるかならないか、ぎりぎりの時期の作品であることも間違いなく、昭和との橋渡しの役目を担っている。

京極作品は、その“厚さ”に敬意を表して。『ホワイトアウト』は、息を告がせぬ迫力に圧倒されて…。

横山秀夫という作家は、今ひとつ私とは相性がよくない。変に人情味っぽいところあって、そこが気に掛かってしまうのだ。世間の評価は高いようだけれども。

他に船戸与一の『伝説なき地』も、と思ったけれど、昭和６３年なのでやめた。実際、このように何を入れるか悩み始めたならきりがないことがわかる。

平成時代のミステリは…？

上記のベストテンに登場する作家のうちで、島田荘司などは、昭和の時代からの流れの人であり、「新本格」がブームになったのは、平成の最初の頃のことだったと思う。

平成中盤から後半にかけてのミステリの流れは、クライムノベルスの傾向だったり、冒険ものだったり、そして「警察小説」へと変化していった。作者の頭の中で描かれた世界が、推理・論理というよりは、より人物像を重視するようになり、派手で大がかりな舞台設定も増え、更に「立体化」されたストーリーになっていったと言えるだろう。

「警察小説」の台頭と同時に、「日常系の謎」と呼ばれる大きな事件にはならない、「生活に密着した不思議」を扱うミステリも増えた。その流れの「ライト系文芸ミステリ」などの誕生も、出版事情の変化と相まって、ミステリの世界を変革させて来ているように感じる。

大きく見れば「警察小説」と「ライト系」の２極化である。

宝島社『このミステリーがすごい！』…１９８８年にＪＩＣＣ出版（別冊宝島編集部）から出た年間ミステリー・ランキング本。私は最初の巻から買っていた。途中から完全に宝島社からの出版に移った。１９９０年版は、表現の仕方の関係で存在しない。（次の年の版名を名乗るようになったから）　他に『週刊文春』などの年間ランキングもあるが、『このミス』は、その年のミステリ作品の指標、ひとつの基準を作ってくれている。